

農 業 2

大野城市教育委員会



田 植 え

田植え

明治の始めまで田植えは綱も定規も使わないで、後向きにさがりながら適宜に苗を植えて行いました。明治21年（1888）回転除草機が考案されると、これと同時に田植え定規もできました。福岡でも正条植の普及に乗りだしましたが、これは病虫害駆除のため中期除草の作業上必要なことでした。明治41年（1908）頃には旧筑紫郡では90%以上に普及しました。



豊 作 祈 願

豊作祈願

田植えが終ると残った苗をきれいに洗い、1束か3束をそれぞれ自分の村の辻に建ててある庚申様（庚申こうしんさま、猿田彦さるたひこ大神）の碑に供え豊作を祈りました。庚申信仰の講は江戸時代各村の集落にありました。また庚申の申がサルである所から「古事記」に出てくる猿田彦と結びつくようになったそうです。市内には庚申塔が9基、猿田彦が30基もあります。



駄 浮 立

井手落とし、駄浮立

田植えの後も、いろいろな作業があります。稲の花が咲き実を結んだころ、田の水を落とします。これを「井手落とし」といい、普通は9月下旬頃に行います。井手落としの後は水の神様に感謝する祭りが行われました。この祭りは「駄浮立」と呼ばれ、竹筒に入れた神酒、川魚、ご飯などを川べりに供えました。またこの日はドジョウをとってきて食べました。上大利地区では「馬振舞」といい牛馬に感謝する祭りであるとされ、今も駄浮立が続けられています。



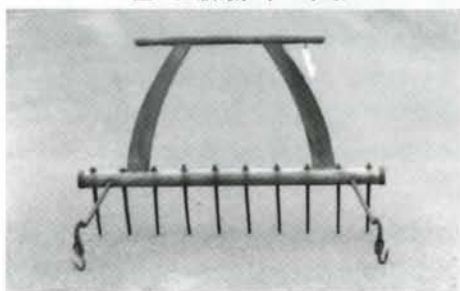
お こ も り

おこもり

どの村でもそれぞれの氏神さまで春ごもりをしていました。もとは4月15日でしたが近年はそれに近い日曜日にするようになりました。その日氏子は各自弁当を持参して神社に集まり神事ののち拜殿や境内で飲食をしました。夏ごもりも春と同じようなもので田植えの後7月初、中旬頃でした、また千灯明といって神社の参道にチョウチンをともし風習もあり、「オヨド」あるいは「ロクガツドウ」ともいわれ夏負けしないように祈りました、秋ごもりはトリアゲの後、豊作を感謝する祭りです。



上 三股鋤、下 平鋤



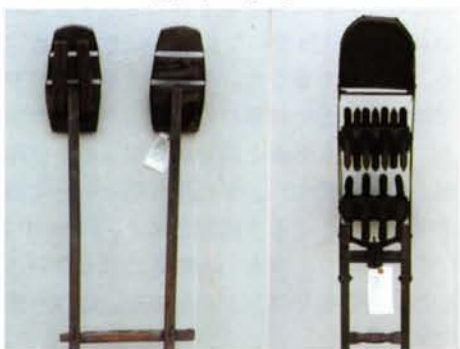
マ ガ



ス キ



ガ ン ツ メ



田 の 草 押 し

耕作用具

クワ（鋤）

鋤は打ちおろして土を耕す道具で、三里を経ずして変わると言われています。平鋤（筑前鋤）、ヤネコギ（開墾鋤）、唐鋤、三股鋤などが土質に応じて用いられました。平鋤は当地方の特色で水田裏作の畦立て、畦みぞさらえに使用されました。

マガ（馬鋤）

マグワともいいます。牛や馬の力を使って、耕した土の塊を細かく砕いたり、田の表面を平らにする農具です。「マガ」は田植えの前の水をはった田を平らにならす作業（代掻き）のときに使い、上手にならしておかないと苗が植えにくくなります。古い時代のマガは歯の部分がかたい櫛の木を三角に削って作られており、縦に6本取りつけた幅の狭いものでした。江戸時代になって歯が鉄で作られるようになり、歯の数も12本に増え、整地幅が広くなりました。

スキ（犁）、モッタテ

犁は牛馬に引かせ、田畑を耕す用具です。その歴史は古くメソポタミア、エジプトに始まります。「抱持たてすき立犁」は略してモッタテといいます。耕す時の使い手の姿勢が、あたかも抱え持つようであるからでしょう。犁の角度を自分で調節しながら深耕も浅耕もできますがそのためには高度の熟練を要し一人前の農夫といわれるにはモッタテを使いこなせることが必要でした、福岡はこの先進地で明治中期には犁耕の遅れていた関東、中部、東北地方に福岡県の馬耕農具とその指導者たちが大いに活躍しました。

田の草取り具

田植えを終えて収穫するまでの大切な作業に、田の草取りがあります、夏の暑い時期に数回行われ大変な労働でした。「ガンツメ」は雁爪とか蟹爪とか書かれ、田植えが終わって草が生え始めたころ、草取りとあわせて株の間の中耕に使いました。中耕は稲の生長を良くするためです。「田の草押し」は1本の物と双連のものが下には鉄製の爪がついていて、押ししたり引いたりして草を引っかけて取りました。